

日本における多文化化と教育支援の展開

～姫路における活動を通して見たこと～

環境人間学部 環境人間学科

准教授 ^{いぬい み き} 乾美紀、4回生 ^{ち ば ゆ う す け} 千葉裕介 ^{し ょ う じ よ し ゆ き} 庄司舜孝 ^{ゆ か み ゆ う き} 由上友基
3回生 ^{ほ り こ し り ょ う き} ◎堀越亮公

キーワード

定住外国人、教育支援、多文化共生、地域連携

研究概要

現在、日本には多くの定住外国人が生活しており、“多民族国家の日本”はまさに到来しようとしている。定住外国人の子どもたちは一般的に日本の学校で教育を受けており、兵庫県の公立学校においても日本語指導が必要な児童生徒数は802人にのぼっている。これは全国でも12番目という高い数値である。環境人間学部が位置する姫路市には、かつて、インドシナ難民の定住促進センターがあったこともあり、ベトナム人、ラオス人が定住しているほか、中国帰国者・日系南米人も多く見られる。彼らは言語や経済面などでハンディキャップを抱えており、その子どもたちも同様の理由から日本の教育についていけない現状がある。私たち乾ゼミは姫路市内で行われている、地域、学校での教育支援活動に参加しており、実際の教育現場で起きている問題を目の当たりにしてきた。児童生徒数に対する教育指導者の不足、不十分な日本語教育支援、家庭への働きかけの不足などが主な問題である。学校や地域、行政が単一に行う支援だけでは限界があり、十分に支援を行うには難しい現状がある。発表者らが見る限り、行政と地域、学校の連携がうまくとれておらず、そのことが支援の不足にもつながっている。この現状を打破するには、家庭を中心とし、行政、地域、学校の連携のとれた円滑な支援が必要である。今後、行政が教育支援の現状を理解し、資金面、人員面において状況に応じた支援をすることが求められる。

アピールポイント

私たちは、次の3か所でボランティアとして教育支援に携わっており、子どもたち、学校の先生などと対話しながら多文化化と教育支援について研究をしている。

<花田中学校>姫路市の花田地区には皮革工場が多くあり、ベトナム人が多く働いている。この地区にある花田中学校では定住外国人が多く、勉強について行けない生徒も多い。教育委員会は中学校に助成金を提供し、大学生（発表者ら）が学習支援を行っている。

<城東町補習教室>姫路市にある城東町総合センターでは、地域の教員やボランティアが中心となり、毎週土曜日の午後に外国人の子どもたちの学習支援のために補習教室を開催している。ここでは30人から40人の子どもが日ごろの学校生活で理解できていない部分や宿題などをボランティアから指導を受けながら勉強をしている。この補習教室は、小学生から高校生まで長期的な支援も行っており、子どもたちが高校、大学への進学し教育を継続できるようにサポートをしており、筆者らもその一端を担っている。

<東小学校ワールドルーム>姫路市立東小学校にはワールドルームという教室があり、約30人の外国人の子どもたちが在籍している。授業についていくのが難しい子どもたちは通常の授業時間にワールドルームで自分たちのペースに合わせた教育支援を受けており、筆者らも時折訪問し、手伝いをしている。

私たちは、これら活動を通して支援不足や行政、地域、学校の連携不足も感じた。定住外国人の子どもたちにとって、ワールドルームや補習教室のような教育支援の場は、子どもたちのコミュニティーであり、同じ境遇の子どもたちをつなぎ合わせる出会いの場であるし、さらには心の拠り所であると感じた。この環境をより良いものにするために地域連携を確立させた教育支援のあり方をより考える必要がある。